

張文環小說之家族構成

— 以父世代與子世代為焦點 —

北見 吉弘 *

摘 要

張文環留下的小說，其背景多為 20 世紀前半段在日本統治之下的台灣地方社會。在作品所提主要人物之家族關係裡，特別引人注目的是舊世代父輩的人物及其新世代的子輩人物之間的關係。且其關係設定幾乎是限定在父子二代。

為了瞭解張文環人物何以主要設定在父子二世代，本研究將探討這些主要人物之特徵、親子間之關係及家族構成中所呈現出的思想。

關鍵字：張文環、台灣文學、小說、新女性、知識分子

*育達科技大學應用日語系 助理教授



張文環小説における家族構成 —親世代と子世代を中心に—

北見 吉弘*

要 旨

張文環小説作品は20世紀前半の日本植民地統治下にあった台湾地方社会を背景とする。そして、これら作品の主要人物をめぐる家族構成において、特に注目されるのが旧世代に属する親世代の人物、そして新世代に属する子世代の人物による構成が顕著となり、ほとんど親子二世代の設定となっていることである。

今回はこのような張文環作品での人物設定が親子二世代の関係に着目し、関連人物の特徴、親子二世代関係が示す作者の思想性を探ったものである。

キーワード：張文環、台湾文学、小説、新女性、インテリ

*育達科技大学応用日本語学科 助理教授



The Family Constitution in the Novel Creation by Zhang Wen-huan, Mainly on a Parental Generation and a Child Generation

Yoshihiro Kitami*

Abstract

Zhang Wen-huan's novel works describes the Taiwanese local society in the early 20th century, it still under the colonial administration by Japan. And, the most remarkable character of these work, are the characters of the parental generation, and of the child generation. These two types of character consists family relation. This time I paid my attention on those character settings between two generations, and check the characteristic of the main characters, and the relations between the two type characters, and also intended to show the opinions of the author about these character settings.

Keywords: Zhang Wen-huan, Taiwanese Literature, Novel, New generation woman, Intellectuals

* Assistant Professor, Department of Japanese, Yu-Da University



1、序

張文環は日本植民地時代にあり、伝統的から近代的に移り行く台湾地方社会を背景に、台湾人一般庶民の生活を描いたことで著名である。主な登場人物は主に二つに分類され、その一つが、作者本人の経歴と同じく公学校教育を受けた新世代の人物であり、息子や娘としての登場が多い。そして、もう一方が儒教伝統の社会に生きた親側人物を対象とする旧世代の人物であり父親と母親としての登場となる。実際、作者の小説作品における登場人物の殆どがこのような世代別による二分類で分けることが可能であり、それら人物で構成された家族関係は殆どが新・旧親子二世代となっている。

今回、筆者が着目したのが、張文環作品に頻繁となる新世代側（子世代側）の周辺人物としての登場で頻繁に見られる旧世代側（親世代側）の存在性、そして、新・旧両世代により構成された親子二世代を主とする人物設定のありかたである。これまでの張文環研究に於いて、研究者の方々の関心を得た人物像は公学校入学を備えた少年や少女、公学校を卒業した男女、適齢期にある新女性像、高等学校教育を受けた男女、適齢期にある媳婦仔など、物語の主人公やヒロインとして登場する子世代側に集中していたきらいがある。だが、これら子世代側の人物を主人公に設定する作者の作品に於いて、その主要な周辺人物として設定され、子世代の生活描写に欠かせない存在となる親世代に関する論述に関しては、現在のところ関連した研究がほとんど見られない。以上の理由により、今回は、張文環がその小説作品に示した親子二世代関係の設定、子世代側と親世代側の関係、及び関連するテーマ性や思想性を探ってみようとした次第である。

2、親子二世代をめぐり

親子二世代の家族構成のうち、親世代の人物では「父」（「親爺」、「父親」）、「母」（「母親」）といった呼称による登場が最も多く、これらは固有名詞や愛称などによる登場でないことから、親世代人物は往々に子世代を主人公とした周辺人物の役割を担う設定となる。その設定の様子は以下の通りである。

まず、父親像と母親像のうち、物語における描写が多いのが父親像であり、



最も多い「父」たる呼称での登場には、封建社会における厳格、理性的、勤労的な家長たるイメージが込められている。それに対して、母親像の登場場面は限定され、中には存在性が示されただけの作品もあり、さほど人物造形に深みは感じられないものが多い。主な理由としては、張文環作品が主に子世代側の生き方を描き、その将来性や人生観に強い影響力を有する人物として、家長として絶対的な権限を有した父親像の存在性が大きかったからであると仮定される。

続いて、張文環作品で主に主人公を担うのが、息子や娘として登場する子世代側の人物であるが、それに関わる親世代側の人物の設定は主に父親か母親かいずれか一人に焦点が当てられるのが常である。その役割は主に子世代側の人生を掌握する役割を担うもので、例えば張文環の小説作品において子世代側が息子像である場合、一家の跡取りを管理すべく父親像が主な親側人物として描かれるのが常である。また、子世代側の中心人物が女性（娘像）である場合や、稀ながら父親の不在である母子家庭の場合では、母親像が親側の中心人物としての設定となる。いずれにせよ、張文環作品に於いて親世代側の人物である父親像と母親像の両者が揃って具体的な登場人物となる作品例は殆どないと言える。強いて言えば、今回扱う対象作品における作者の唯一の長篇「山茶花」に設けられた一姉妹（錦雲と娟）の両親像が例外となる程度である（即ち、父親像、母親像ともに作品における具体的な登場人物としてその存在感を示している）。作者が親世代人物における父親像、母親像のいずれか一方のみを具体的な登場人物として扱ったのは多くの作品が示している通りである。要するに、張文環にとって、多く脇役を担う親世代側の人物設定は、主人公である子世代側の周辺人物であることに関連し、たとえそれが子世代側の人生描写において重要な役割を担う設定であるにせよ、父親か母親かどちらか一方に焦点を当てれば十分であり、物語展開に支障はなかったであろう。

例えば、張文環の処女作となる「落蕾」の場合では、主に三人の公学校卒業生を中心に物語は進行する。その三人とは、義山、秀英、明仲であり、公学校時代のクラスメートの関係にある。主人公は貧乏家庭出身の義山であり、秀英はその恋人（即ちヒロイン）、明仲は親友という役割である。これら人物のうち、その家族構成が示されているのが、秀英、明仲の両者であり（義山はなし）、秀英の場合が「両親」と「弟」が、そして明仲の場合が父親（「親爺」）の存在が示されている。このうち、秀英に関わる主要たる家族人員が母親（「母」）であり、この「母」が担うのが秀英を恋人の義山と分かれさせ、金持ち男性との縁談と結婚を承諾させるという役割である。ここには、封建社会における結婚問題を



めぐり、子世代側である秀英と親世代側である「母」との新・旧異なった価値観の対立、親子二世代間における葛藤が描かれている。そして、明仲の場合、この人物はその後の張文環小説に多数登場する作者の分身たる知識人型の青年像である。その家族構成として示された人物が「親爺」、即ち父親であり、この父親像は息子のために生活を切り詰め学費や生活費援助を行う人物としての設定である。これは、作者が実父をモデルに幾多の小説作品において繰り返し描いた「父」像の最初の造形であり、関連する「父」像の登場する作品では、主に理想的な父親像として描かれているのが特徴である（詳細は後述にまわす）。

「落蕾」に示された如く、作者の作品は公学校教育を受けた子世代側の生き方、将来性、運命を重点にして描いたものが殆どである。また、それら作品では往々に親子二世代の家族設定が常に設けられ、親世代側一人と子世代側一人の二者間における葛藤、対立、闘争、妥協、和解、信頼、愛情などの感情関係をめぐる家庭生活の様子が示され、その際、親世代側に関して父親像或いは母親像の一方が主要人物として焦点が当てられ、常に子世代側のその後の人生に対し、強い影響力を与えた人物として描かれているのが常である。

3、親子二世代をめぐる人物設定

3.1、張文環の小説における家族構成の全体像

張文環小説作品に描かれた家族構成を理解すべく、以下、その小説で描かれた家族設定を発表年度順に纏めた。なお、リストに挙げた主な家族構成は主人公、ヒロイン、主要人物に限定した。また、作者の作品は子世代が主人公、親世代が周辺人物の設定となる傾向が多いことから、子供側の立場よりその家族構成を示した。親世代側、子世代側ともに死亡、行方不明等の人物もあるが、凡そ作品にその存在が示された人物に限り、作者がその存在性を意識したものとみなし、リストに挙げた。更に、張文環小説全体の家族構成の全体像を理解するため、関連人物の登場しない作品名も“関連人物なし”という注意書きを以って提示した

作品名（発表年月日）

子側：「作品における主要な呼称」（家庭における身分）。人物が複数の場合、



年齢の高い順に列挙した。なお、男性人物で、長男や次男などが明らかでない場合は「息子」という言葉で示した。同様に女性人物において長女や次女などの位置づけが不明な場合は「娘」とした。

親側：「作品における主要な呼称」（家庭における身分）。両親の存在が認められる場合、父親像、母親像の順に挙げた。

~~~~~：作品の主人公

▲：張文環作品は殆どの人物像が親子二世代の家族構成であるが、僅か二作品にのみ親子孫による三世代となっている。この二作品における家族構成に対しては、▲の表記を付した。

①「落蕾」（1933.07.15）

1)子側：「明仲」（息子）

親側：「親爺」（父）

2)子側：「秀英」（娘）、「弟」（息子）

親側：父親<sup>1</sup>、「母」

②「父の要求」（1935.9.24）

1)子側：「阿義」（息子）

親側：「父」、「母」

2)子側：「嘉津子」（娘）

親側：「おばさん」（母）

③「過重」（1935.12.28）

子側：「健」（長男）、「源」（次男）

親側：「父」<sup>2</sup>、「母」

④「部落の元老」（1936.04.20）

子側：「阿三」（長男）

親側：「榮爺さん」（父）、「母」

⑤「豚のお産」（1937.03.06）

1)子側：「息子」、「息嫁たち」（嫁）

親側：「阿春爺さん」（父）、「阿春婆さん」（母）

2)子側：「阿圳」（長男）

1 物語では父親像の具体的な登場場面は一切ない。ただし、物語中において秀英が「両親」を持つ身分である表記があることで、父親像の存在性を確認した次第である。

2 物語では行方不明者、被拘束中、失踪中らしいが、生死は不明。



- 親側：「父親」(父)<sup>3</sup>、「母親」(母)
- ⑥「二人の花嫁」(1938.10.01)  
子側：「進發」(長男)、「嫁」(嫁)  
親側：「福爺さん」(父)、「婆さん」(母)
- ⑦「辣蕪の壺」(1940.04.01)  
子側：「息子」(長男)、「嫁」(嫁)  
親側：「粉婆さん」(母)、「爺さん」(父)
- ⑧「山茶花」(新聞連載、1940.1.23～1940.5.14)  
1)子側：「賢」(長男)  
親側：「父」及び「楊德義」(父)、「母」  
2)子側：「錦雲」(長女)、「娟」(次女)  
親側：「父」、「母」稍微  
3)子側：「嬋」(娘)  
親側：「父親」(父)
- ⑨「藝姐の家」(1941.05.27)  
子側：「采雲」(娘、媳婦仔)  
親側：「母」(義母)
- ⑩「部落の惨劇」(1941.09.01)  
子側：「萬壽」(長男)、「弟」(次男)、「淑花」(長男の婚約者、媳婦仔)  
親側：「父」、「母」
- ⑪「論語と鶏」(1941.09.04)  
1)子側：「源」(長男)  
親側：「父」、「母」  
2)子側：「嬋」(娘)、「弟」(息子)  
親側：「父」、「母」
- ⑫「夜猿」(1942.02.01)  
子側：「民坊」(長男)、「哲」(次男)  
親側：「父」及び「石」(父)、「母」
- ⑬「頓悟」(1942.03.30)  
子側：「為徳」(長男)  
親側：「父」、「母」

---

3 死去した身分だが、物語では生前の様子が描かれている。





- ⑭ 「閩雞」(1942.07.11)  
子側：「月里」(娘)、「德乘」(長男-死去)、「福乘」(次男)  
親側：「林清漂」(父)
- ⑮ 「地方生活」(1942.10.19)  
1)子側：「澤」(長男)  
親側：「父」及び「王主定」(父)、「母」  
2)子側：「婉仔」(長女)、「淑」(次女)  
親側：「楊思廷」(父)、「(楊思の)妻」(母)
- ⑯ 「媳婦」(1943.11.17)  
子側：「阿全」(長男)、「阿蘭」(長男の婚約者、媳婦仔)  
親側：「父」(父)、「姑」(母)
- ⑰ 「土の匂ひ」(1944.7.1)  
1)子側：「節」(長女)、「輝清」(次男)<sup>4</sup>  
親側：「父」(父)  
2)子側：子側：「秀德」(長男)、「秀謙」(次男)、「節」(長男の嫁)、「阿蘭」  
(次男の嫁)  
親側：「舅」(「節」の義父)、「老母」(母)  
3)他：「塔房」(孫)<sup>5</sup>

以上、研究対象の該当となるのは張文環の残した 23 作品中の 17 作品である。リストに挙げられていない作品は家族構成設定のない「みさを」(1933.12.30)、「泣いてゐた女」(1935.05.05)、「憂鬱な詩人」(1940.05.01)と、家族構成が描かれながら、その構成が例外的に属する「迷児」(1943.07.31)<sup>6</sup>、「雲の中」

4 「姉のうへにもう一人の男の子がゐるたが、二つのときに亡くなった」とある如く、既に「姉弟二人きり」(「土の匂ひ」p.15、p.12)となっている。(張文環「土の匂ひ」『臺灣文藝』第1巻第3号)

5 「土の匂ひ」における「舅」(父親像)の家族構成は三世代家族であるが、親像である伝統型と子供側である近代型との二世交代交流が中心(孫の「塔房」は大きな役割を担わない)であることから、今回の研究の対象内とした。

6 この作品は張文環作品には珍しく、親、子、孫による三世代家族であるが、社会底辺のある一家族を描こうとした張文環の作風では、極めて特殊なもので、親を旧世代に人物に、子供を新世代に子側に描こうとする張文環作品の設定傾向から外れた作品である。なお、同じ類の作品が張文環作品に見られないため、今回は例外として扱わせていただく。ちなみにこの作品に描かれた家族構成(親、子、孫)は以下の通りである：親：「大目仔」(父、雜貨屋経営)、「夫婦」(母親の存在。／子：「黒ちゃん」(「末子」)、「阿花仔」(長女)、「婿」(「阿花仔」の夫)、「長男」。／孫「双児」(「阿花仔」の生んだ子)。



(1944.11.10)<sup>7</sup>、そして、作者が長期間にわたる作家活動休止後、1975年に発表した長篇『地に這うもの』<sup>8</sup>である。

まず、リストを見た限り、子側(子世代側)の人物では少年少女、青年男女らの未成年者が多くを占め、家長の扶養家族の設定、或いは成人でありながらも社会人として未熟な長男像としての設定である。これら子世代側の主な人物造形には、大学を卒業した男性、結婚を控えた男女、結婚したばかりの若夫婦、商店経営の跡取りなどの成人も含まれる。

いっぽう、親側(親世代側)の人物では、主に家長である父親像と、その伴侶たる母親像が設けられ、或いは片親の場合もあるが、どの人物においても程度の違いはあるが、未成熟な子世代の将来性や生活基盤確立に憂慮する親世代の姿が示されている。即ち、張文環にとっての関心事が子世代人物の生き方や将来性に置かれ、その家族構成にしても、子世代人物の将来的な人生に大きく関わる意味で、父親像か母親像のみが必要な人物設定とされた。そのため、祖父母や、孫世代の設定は殆ど見られず、張文環作品における親子二世世代家庭の設定でない例は、「迷児」、「土の匂ひ」に示された二つの三世世代家族のみである。

ここで、張文環小説に見られる親子二世世代を中心とする家族構成のありかたを以下の二点に纏めた。

一、主要人物とその家族構成に関し、作者の関心はあくまで台湾地方社会に生きる伝統型の旧世代と、近代型の新世代との親子間の関係にあった。主要人物は子世代側が多くを占める。また、数は少ないが親側が主人公となるケースもあり、この場合では、子世代側はその周辺人物として登場する。

二、張文環にとって家族構成における関心は主に親子二世世代の関係に絞られ、それぞれの親子間の異なった思想性、価値観などを描くことに主旨があったと思われる。

---

7 この作品は台湾総統府情報課委嘱作品であり、往来の作風とは異なり、張文環作品では「みさを」や「迷児」と同じく、新世代の若者を描写した箇所がない作品であるため例外として扱った。家族構成は親子二世世代であるが、内容的には幼い娘を持つ一人の中年女性の生き様を描いたものである。作品における家族構成は以下の通りである：親側：「水來」(父)、「阿秀」(母)／子側：「娘」(長女)。

8 張文環の作家全盛期の作品ではなく、晩年になって発表されたものである。主に戦前から戦中に発表された往来の作品とは異なり、内容的にも人物造形にもかなりの飛躍があるため、今回は研究対象として扱っていない。



### 3.2、親子二世代の設定に関して

まず、子世代人物の多くが主人公の設定であることから、関連人物の殆どに固有名詞や愛称が用いられている（リストでは\_\_\_\_\_にて表記）。男性人物が女性人物よりも多く、一人っ子や長男が主人公であるケースが常であるのも、それが一家の跡取りとしての存在性を示す人物だったからである。また、子世代側が主人公や中心人物となり、仮にそれが二人以上（兄弟、姉妹など）である場合にしても、常に物語の中心として描かれる人物は殆どがそのうちの一人に絞られる（⑧「山茶花」、⑮「地方生活」に描かれた一对の姉妹関係は例外とする）。例えば①「落蕾」の場合、作者が中心的に描いた人物はヒロインの秀英のみであり、その「弟」は存在性が示されただけに留まり、登場場面は皆無である。

いっぽう、親世代の人物では、主に子世代側の周辺人物の設定となるのが常であり、前述の如く「父」か「母」の呼称での登場が最も多い。「父」、「母」の両者が確認できる作品もあれば、「父」か「母」の一方だけの作品もある。だが、いずれにせよ父親像か母親像のどちらかに焦点が当てられるケースが殆どである。例えば、②「父の要求」、⑧「山茶花」、⑬「頓悟」、⑮「地方生活」などは、父親像が主体に、「父」による呼称での登場となり、往々に子側人物の将来に大きな影響力を有する人物として設定され、経歴、思想性や人生観の他に、詳細なる内面性描写が施されている。それに比べ、母親像は単に存在が確認できるに留まり、性格描写や生活描写は殆ど施されていない。ちなみに、作品において「父」や「母」の呼称での登場でない親側の人物、即ち⑭「鬮雞」林清漂、④「部落の元老」榮爺さん、⑤「豚のお産」阿春爺さんと阿春婆さんなどに「父」や「母」の呼称が見られないのは、作者が商人像特有の性格を描くことを意図し、父親や母親としての一面よりも社会に生きる一商人として描かれた人物であるからによる。<sup>9</sup>即ち、作者は敢えて「父」や「母」による呼称の使用を避け

9 ⑭「鬮雞」においては月里の父親として登場する林清漂は実名での登場となり、作品では娘を利害結婚の手段に利用した計算高くて利己的な、張文環作品全般に於ける指折りの反面人物として描かれている。往々に作者の批判、鞭撻の対象たる人物は往々に姓名による登場である。また、④「部落の元老」榮爺さん、⑤「豚のお産」阿春爺さんと阿春婆さん、⑥「二人の花嫁」福爺さんといった具合に愛称による登場である「～さん」という呼び名が多用された人物の場合、主に彼らの小市民氣質を描かんとする作者の人物描写の意図があり、これらは商人像の醜態を描き出した張文環小説では限られたユーモア小説作品となっている。詳細は先行研究北見吉弘（2013）「張文環のユーモア小説における内容及び人物設定」に記載されている。



ているのである。

## 4、人物像の分析

張文環の小説作品全般における家族構成をめぐり最も多く見られる場面設定が、親世代側と子世代側の間での新・旧価値観の違いによる不和、確執、諍いなどの対立場面であり、張文環作品には常に伝統的と近代的との価値観の違いがもたらす家庭没落や血縁断続などの深刻な問題意識が示されている。以下、子世代側、親世代側の各人物造詣を分析し、それら人物の性格、生活などの描写より、そこに込められた作者の思想性を探っていきたい。

### 4.1、子世代側

まず、子世代側の人物の場合では主に二種類に分類され、一つが、作者が自身の体験や経歴を題材に描き出した自伝的要素を濃厚とする分身人物であり<sup>10</sup>、もう一つがその他の作者と同世代での主に公学校教育を施された作者と同世代の人物である。前者は作者の性格や思想性を強く受けた主観性を濃厚とする人物であり、後者は主に作者が見た俗世間における人物を対象とした観察対象である。とりわけ、作品に多く登場するのが後者であり、主には当時の公学校教育や、近代的な時代の流行の影響を受け、都会的でモダンな生き方に憧憬するのを顕著とする。主には①「落蕾」秀英、④「部落の元老」阿三、⑤「豚のお産」1) “息子” 及び 2) 阿圳、⑥「二人の花嫁」進發、⑦「辣蕪の壺」“息子”、⑧「山茶花」2) 娟、⑩「部落の惨劇」萬壽、⑭「閨雞」月里、⑰「媳婦」阿全が挙げられ、これらは当時の台湾において厳禁された男女自由交際や恋愛結婚を認め、社会的風紀を乱した人物となり、常に作者の鞭撻の対象として描かれている。また、少数ながら⑯「地方生活」淑の如く、高学歴取得により、利己的、個人主義的たる生き方を選び墮落したインテリ型の女性もある。

10 作者の個人的、自伝的作品の要素を濃くする。小資産家出身である張文環本人の家庭背景が反映され、父親の経済的支援の下、高学歴取得に尽力し、或いは日本留学を果たすなどの特色と有する。だが、このような高学歴取得を願う人物は当時の台湾社会では極めて稀な存在に過ぎず、あくまで作者の自伝的要素の産物として判断し、当時における若者像一般とは分別すべきである。主要人物は①「落蕾」明仲、②「父の要求」阿義、③「過重」健、⑧「山茶花」賢、⑪「論語と鶏」源、⑫「夜猿」民坊、⑬「頓悟」為徳、⑮「地方生活」澤、⑯「土の匂ひ」輝清が挙げられる。



いずれにせよ、作者の観察による子世代側はその人間性に大きな欠陥を有する存在であった。即ち、張文環は当時の自身と同世代の人物に対して、かなり厳格で辛辣な見解を示していたと言える。

## 4.2、親世代側

前述の如く、親世代に関しては、主に子世代人物をめぐる周辺人物としての設定となり、「父」、「母」の呼び名の登場が主となる。例えば①「落蕾」に於いてヒロイン秀英をめぐり描かれた親側の中心人物は「母」であり、父親に関しては秀英が義山に述べた「あんたと妾二人きりなら問題はないですけども、うちの両親と弟は……」<sup>11</sup>の一言において、「弟」同様に、単に存在が確認できる程度である。ただし、①「落蕾」の如く母親が親側の中心人物として描かれたケースは稀であり、③「過重」や⑤「豚のお産」<sup>2)</sup>の如く父親不在の家庭環境を除き、ほとんどの作品に於ける母親像はその登場場面が僅かである。

張文環作品においては、息子や娘として登場する子世代人物の生き方や命運は全て父親の価値観や意思決定によって左右されるもので、張文環の描いた親側人物の中心はあくまで父親にあったと言える。実際、張文環作品において絶対的な人物描写の比重が父親側にあったのは、男尊女卑や家父長制を特色とする封建社会が背景となったからによる。⑧「山茶花」賢、⑮「地方生活」澤、⑰「土の匂ひ」清輝ら長男像が自分の理想であった日本留学を実現できたのも、家計を犠牲にしてまで息子に学問を授けたいと願う父親の存在があったからであり、また①「落蕾」秀英、⑧「山茶花」錦雲、⑭「閨雞」月里らが結婚を転機に不幸で悲劇な人生を余儀なくされたのも、その父親が封建的利害結婚という金銭面の利益を重視したからである。

## 5、親子二世設定に見られる思想性

### 5.1、人間性の問題

まず、①「落蕾」明仲、⑧「山茶花」賢、⑯「地方生活」澤、⑱「土の匂ひ」

11 張文環「落蕾」中島利郎(編)(1999)『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』、東京：緑蔭書房、p.15。



清輝等の長男像は、青年時代の作者の実生活を題材に、書生、留学生、知識人として描かれた人物像であり、作者本人の思想性や性格が直に反映された実質上の作者の分身でもあり、作品内における周囲の人物像に対する観察者として作者の思想や感情を代弁する役割を担う。同類の人物では、主に作者の少年時期の生活を題材に登場した③「過重」健、⑪「論語と鶏」源、⑫「夜猿」民坊等の少年像が挙げられる。これら作者の分身をめぐる親世代側の中心人物となるのが、「父」の呼称で描かれた父親像であり、作者の実父が具体的なモデル<sup>12</sup>となっている。とりわけ、その父親としての個性がより詳細に描かれたのが、⑧「山茶花」賢、⑯「地方生活」澤、⑱「土の匂ひ」清輝等の「父」像であり、日本での大学留学を背景に文学や哲学を通じ、道德観や人道主義的なありかたを模索していた頃にあった長男像の目線からの観察対象となっている。⑧「山茶花」の「父」(楊徳義)の場合、伝統社会に浸透しつつあった近代化の波や近代化に向かう社会の趨勢を把握し、長男に対しては「新しい学問もなくちやいかぬ」、「金なんぞ持つてゐたら、わしは子供を留学に出す」<sup>13</sup>と言った考えを示す。これは保守的な封建伝統の継続しか頭にない当時の一般庶民にはとうてい理解の及ばないものであった。続いて、⑯「地方生活」の「父」(王主定)の場合、儒教的教育を重視する立場より「勿論無學な國民を養ふのは愚の骨頂である」という考えから、息子に対して「うんと勉強して、この人達に新しい學問を示さなければならぬ」<sup>14</sup>という考えを有するもので、造形的には⑧「山茶花」の「父」(楊徳義)と共通した要素が見られる。そして、⑱「土の匂ひ」清輝の「父」の場合、清輝を日本留学に出した経緯では上述した二者と共通し、その長男の留学に対する見方は同類のものである。この作品における「父」の伝統的知識人としてのありかたは、主に長女「節」への人間教育に示されている。以下は関連箇所引用である。

12 張文環の父親が当時としては子供に高學歷施した希少な人物であったことは、「張文環親戚・旧友訪探録」(柳書事訪問・記録)における「第一章 張鈞漢氏へのインタビュー」に記載されている。それによれば、張文環の父である張察は、「経済力」においては普通よりも幾分よい程度であったが、子供達に立派な教育をつけてやりたい一心で、息子に日本留学をさせたこと記載され、かつて張文環が育った小梅では、この話題でももちきりであったと記され、その「父」としての「度量の大きさに感服せずにはおれなかった」とある。「張文環親戚・旧友訪探録」(柳書事訪問・記録、野間信幸、馬雪峰、岡部路子略)

13 張文環「山茶花」中島利郎(編)(2002)『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京：緑蔭書房、p.166。

14 張文環「地方生活」中島利郎(編)(1999)『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』、東京：緑蔭書房、p.280。



女學校三年生の時、家事上のことで中途退學しなくてはならなかつた。姉は性格的にややもするとひがみがちであつた。だが家事の手傳ひをする傍ら、毎夜、父から四書五經ををしへてもらつたりした故か、姉はすつかり家庭的な娘になつて、ひがみ所か、父の帳簿を手傳ふ事に興味をおぼへ、かへつて朗らかになつたやうであつた。いはゆる古い型の美人で帳簿は父親よりも慥かに上手だ。その上、國文も漢文も達者で、(以下省略)<sup>15</sup>

引用には、長女の「節」が「父」の教化を受けたことにより、伝統的女性美を有する女性の理想像となりえた経緯が示されている。こうした「父」の教化や影響により、結果として、各関連作品における息子像や娘像らには、多くが伝統的社会における自身の生活基盤の確立を実現する適者生存型としての存在感が示されている。

以上、①「落蕾」から⑱「土の匂ひ」に描かれた親子関係は、作者がその実父をモデルに、作者の自伝的要素を含む人物造形によるものを基準に、その子世代人物に関しては全てがその生活基盤が確約されたものとなっているのである。

ここで考えるべきは、如何なる理由で張文環がこのような極度に人間道徳や学校教育を重視する親子関係を描いたかということである。それを探るには主に主人公男性が作者の分身でないケースの家族構成を見れば明らかとなり、そこに描かれた子世代側には往々に道徳心や人間性に欠如した人物が実に多いことが見受けられる。例えば、それが息子像の場合、⑩「部落の惨劇」萬壽、⑰「媳婦」阿全等都会で女遊びに明け暮れる放蕩息子、⑤「豚のお産」1) “息子”、⑦「辣蕪の壺」“息子”の如く稼業を引き継ぎながらも生活力が欠如した無能者の類が多く、また、娘像の場合では①「落蕾」秀英、⑮「山茶花」娟ら自由恋結婚を重視し風紀を乱した親不孝物、⑯「地方生活」淑<sup>16</sup>、「二人の花嫁」阿嬌<sup>17</sup>の如く高學歷を手段にして条件の良い結婚を目論む利己的女性が主

15 張文環「土の匂ひ」『臺灣文藝』第1巻第3号、p.12。

16 張文環作品では女学校進学を実現した数少ない人物の一人であるが、その進学の目的が、社会的に有用な人材となることではなく、条件の良い相手男性との結婚を実現することであり、実際、淑は医学専門学校の学生たる男性との婚約を実現する。

17 作品「二人の花嫁」における阿嬌は「第二回か第三回目の(公学校)卒業生」であり、当時としてはインテリ女性としてもてはやされた。だが、阿嬌の學歷取得の目的が、嫁ぎ先とし



となる。作者の親子二世代を主とする家族構成において、往々に親子間の不和や確執といった社会批判が描かれている理由も以上の理由による。

子世代側の人間性の劣化の所在は、公学校を通じた新教育や、近代化、個人主義など反伝統的な価値観の影響もあるが、張文環作品では、これら子世代の人間性の墮落の所以をそれら時代の趨勢や影響よりも、その親世代の人徳や人間性の欠如に置いているのが特徴である。即ち、張文環は、それら墮落した子供世代人物を輩出した親世代側に対して鋭い批判の目を向けているのである。主には親世代側の人物が主人公である場合に顕著となり、④「部落の元老」榮爺さん（床屋経営）、⑤「豚のお産」阿春爺さん（もと番頭）、⑦「辣蕪の壺」粉婆さん（雑貨屋経営）、⑥「二人の花嫁」福爺さん（金銀紙幣店経営）ら商人像が対象として挙げられる。どれもが俗世間に於ける利己的で世俗的な小人物として描かれ、かつ長男を持つ親としての設定であるのが特徴である。そして、これら親側人物に手により育てられた子世代側の人物は、殆どが公学校での教育を受けた人物でありながら、家庭での道德教育の欠如より、無能、不道德、低俗、不勤勉といった反面性のみが描かれている。

張文環作品の特徴の一つは、その商人批判にあり、興味深いのは、前述した⑧「山茶花」、⑫「頓悟」、⑪「夜猿」、⑬「地方生活」で描かれた「父」像が商売人としての生き方に対して強い反感を懐いているということである。例えば⑧「山茶花」賢の「父」は自身が店経営者たる身分にありながら、商人としての生き方を嫌い、結果、長男の賢には店の跡取りとすることを望まず<sup>18</sup>、高学歴を授け知識人として育てあげる。⑬「地方生活」澤の「父」も同じように商店経営主でありながら、長男の澤に高学歴を取得させ教育者としての道を歩ませようとしたのも同じ理由による。

主に作者の分身である子世代側の人物像の「父」像は、反資本主義的、人道主義的な思想性を持ち、その価値観がその子世代側へと継承されるかたちとなっている。そしてその対極にあるのが俗世間に蔓延る利己的な親子関係であり、具体的には功利主義的、打算主義的に物事を判断する親世代側、そして道德観や勤勉性の欠如した子世代側による家族構成であった。即ち、張文環による親

て「どうしても醫者さんか、公学校の訓導先生でなければ絶対に嫁に行かない」（「二人の花嫁」p.95）とあるように、阿嬌にとっての高学歴取得は封建的利害結婚を有利にすべく手段でしかなく、利己的、俗世間的な価値観を濃厚とするものであった。（引用：張文環「二人の花嫁」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p.95）

18 以下は関連箇所引用である「賢の父が、山の部落から、R K 庄に出て、店を開いたのもこの商人のずるさを発見したからである」（「山茶花」p.165）





子二世家庭の設定が意図するのは、当時の伝統社会における理想的な親子二世家庭を比較対象に、当時の俗世間一般の墮落した親子二世代関係に対し鋭い風刺や批判などの鞭撻を行うことであつたと考えられる。

## 5.2、教育や道徳の問題

俗世間に於ける庶民の人間性墮落の要因に関して言えるのは、何よりもそれら親子二世家庭が共に道徳教育ならびに学校教育を軽視しているという点である。この種の家世における親世代側の父親像は世襲制の恩恵を受け、親から財産を引き継いだ人物が常であり、世間との利害関係と金儲けのみを重視する傾向にある。とりわけ儒教の道徳観念の影響を濃厚とする当時の教育観は自身の利害重視の価値観とは相対立するものであり、例えば商店経営像が多いことにも明らかであるように、子供への道徳教育や学校教育などは、自身の持つ功利主義的価値観からして不必要なものであつた。これら父親像の思想性は、前述した張文環の実父をモデルにして描かれた教育重視型であり知識人型に属する「父」像とは対立した関係にあることは言うまでもない。要するに、①「落蓄」明仲、②「父の要求」阿義、⑧「山茶花」賢、⑯「地方生活」澤などが高等教育を受けられ、伝統的な道徳観を強く意識できたのは、当時としては稀であつた教育重視型の「父」の存在があつたからに他ならない。

ちなみに、リストにある子世代側の人物では、⑧「山茶花」娟の如く公学校中退も含め、殆どが公学校教育の経験者となっている(⑭「閨雞」月里を除く<sup>19</sup>)。ただし、それら子世代の親世代側は必ずしも公学校教育や学歴取得などに価値観を有していたわけではない。それは主に、多く商店経営者たる親世代を持つ身の上であり、功利主義を認める稼業の環境下、教育無用とする思想性の影響を受け易いものであつたからによる。以下は④「部落の元老」榮爺さんに関する引用である。

阿三も二年ぶつ々けて落第したから、榮爺さんはもう再び息子を學校へ連れて行く必要はないと思つた。どうせ金ピカの肩章をつけさせてやる望みではないし、たかが自分の店の収入支出の読み書きを覺えるぐら

19 基本的には月里にも新時代の人物としての性格描写がなされている。公学校制度の施行されてきた時代に生まれたが、父親の林清漂は二人の息子は通わせながらも、月里にはそれを許さなかった。



るなら、學校へ行かなくとも店の手傳ひして居れば澤山だ。<sup>20</sup>

榮爺さんの如く一般の小市民はさほど子供への教育を重視しておらず、より問題となるのが、この種の人物が学校教育そのものをして、読み書きができれば十分という実益重視の類のものと考え、人間性の育成において重要な道德教育の一面をまったく顧みていないことである。続けて、⑤「豚のお産」阿圳の例を見てみたい。以下は公学校卒業後も社会人として独立できない息子阿圳の放蕩ぶりを嘆いた母親の内面性に関するものである。

こんな息子にしてしまったのは、時代の所謂モダンと云ふ思想のためだ、でなければ、吾がをとなしい息子をこんなに見榮坊に育て、しまふやうなことはない。實に詰らない影響をしたと母親は零すのである。とにかく公學校に入れたのがそもそもの間違いであるやうに思ふ。<sup>21</sup>

阿圳は父親の「道士」稼業を引き継いだ身の上であり、利己主義的、反道德的な性格の持ち主である。また、その親世代側にしても、他作品での類似した人間関係から判断し、それが俗世間的で打算的な生き方に妥協した人物であり、教育失敗型に属する人物であったことが想像される。

以上の如く子世代側の不遜たる要因が主に親側人物の教育に対する責任感の欠如にあったのは明らかである。また、この類の親側人物には往々に道德心の欠落も甚だしく、その影響を受けて成長した子世代の男女にしても殆どが勤勉性を欠如した利己的人物、社会的無能者、肉体的な虚弱者、自立できない親不孝者などに成長するというもので、親子二世間の人間性をめぐる問題は因果関係にあった。

## 6、結論

張文環の多くその小説作品に示すところの人道主義とは、その実父から受けた影響が強く、作者は自身の少年期から青年期を通じ、実父との生活から伝統的道德観尊重の考えを学んだと考えられる。結果として、後に作家となった張

20 張文環「部落の元老」『臺灣文藝』第3巻第4、5合併号、p.11。

21 張文環「豚のお産」『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四巻〔張文環〕、p.87。



文環をして、親子二世代家族の設定のもと、多くの世俗的で利己的な親世代像と、不道徳で利己的な子世代像を登場させる要因となった。張文環作品において度々描かれる親子二世代間における対立や確執の所以は、伝統を支持する親世代側と新思想や近代化の影響を受けた子世代側との思想面でのギャップが主因であるように見られるが、本質的に作者が示す人間性の墮落の所以は人間の伝統的な道徳観念や美德の欠如にあるものである。即ち、近代化や資本主義化などの時代性はそれを促した外在要因に過ぎず、最終的には誠実で正しい人間たるべく精神性の欠如した当時の台湾庶民の不埒な内面性における様子が、作者をして伝統再評価の重要性を意識させたと考えられる。

その結果、張文環はその小説創作を通じ、伝統や道徳観を重視する理想的親子関係、そして資本主義や個人主義を重視する現実的家族関係の両者を示し、それぞれを対立関係に設定することにより、主な思想表現の手段としたと言えよう。



## 参考文献

### テキスト

- 張文環（1936）「部落の元老」『臺灣文藝』第3卷第4、5合併号 pp.2-17
- 張文環（1943）「迷兒」『臺灣文學』第3卷第3号 pp.130-137
- 張文環(1944)「土の匂ひ」『臺灣文藝』第1卷第3号 pp.3-46
- 張文環(1944)「雲の中」『臺灣文藝』第1卷第5号 pp.55-64
- 張文環（1975）『地に這うもの』、東京：現代文化社
- 中島利郎(編)(1999)『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』、東京：綠蔭書房
- 中島利郎(編)(2002)『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京：綠蔭書房

### 研究著書、論文など

- 北見吉弘（2013）「張文環のユーモア小説における内容及び人物設定」『真理大學 人文學報』第14期 pp.67-91、台北：真理大學
- 張文薰（2006）「由『現代』觀想『故鄉』－張文環<山茶花>作為文本的可能」『台灣文學研究學報』第2期 pp.5-28、台南：國家台灣文學館籌備處
- 張文薰（2005）『植民地プロレタリア青年の文芸再生：張文環を中心とした「フオルモサ」世代の台湾文学』（東京大学大学院人文社会系研究科中国語中国文学専攻 修士論文）、東京：東京大学
- 張文薰（著）中島利郎（訳）（2007）「立身出世を求める青年たち－『風俗小説』張文環新論－」『日本台湾学会報』第4号 pp.56-80、東京：日本台湾学会
- 陳英仕（2012）「張文環『山茶花』析論」『臺灣文獻』179年3月。p.155-196、台北：臺灣文獻館
- 中島利雄(1999)「張文環作品解説」『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』 pp.335-345、東京：綠蔭書房
- 柳書琴・陳萬益・中島利郎（編）（1999）「張文環著作年譜」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷〔張文環〕』 pp.347-359、東京：綠蔭書房
- 柳書琴（著）野間 信幸（訳）馬雪峰（他訳）（2011）「張文環親戚・旧友訪探録」『東洋大学中国哲学文学科紀要』19 pp.150-122、東京：東洋大学

